

種生物学会ニュースレター

The Society for the Study of Species Biology Newsletter No. 54



選挙実施のお知らせ 1 / 第53回種生物学シンポジウム（東北・オンライン）のご案内 1
第52回種生物学シンポジウム（滋賀）の記録 5 / ポスター賞受賞者によるシンポジウム参加記 7
第18回男女共同参画学協会シンポジウム参加報告 8 / これまでの会員数の推移 9
事務局からのお知らせ 10 / 会計報告 11

選挙実施のお知らせ

会則第21条、24条、31条、ならびに「選挙に関する規則」に従い、次期会長・副会長・地区幹事選挙（任期：2022年1月1日～2024年12月31日）が選挙管理委員会によって行われます。お手元に郵送される投票用紙を同封の返信用封筒で選挙管理委員会へお送りください。投票締め切りは【11月5日（金）必着】です。皆さんのご協力をよろしくお願い致します。

第53回種生物学シンポジウム（オンライン・東北）のご案内

<https://sites.google.com/view/sssb53symposium>

第53回目となる本年度の種生物学シンポジウムは、新型コロナウイルス感染症の状況を考慮して、昨年度に引き続きオンラインにて開催することとしました。準備段階のギリギリのタイミングまで、現地開催とオンライン開催を併用したハイブリッド開催を目指していましたが、残念ながら現段階では12月にさらなる感染の波が訪れる可能性を否定できず、苦渋の決断としてオンライン開催を選択しました。本来、合宿形式での親密な交流を大前提としてきた種生物学シンポジウムとしては、非常に残念な開催形式ではありますが、限られた条件の中でも種生物学会の良さを少しでも発揮できるような機会にしたいと思っております。ご理解のうえ、みなさま奮ってご参加いただきますよう、よろしくお願い致します。

例年とは異なる点として、まず参加費を無料にします。学会員の方は、本ニュースレターの案内に従って参加申し込みをしていただければ、どなたも無料で参加およびポスター発表が可能です。このチャンスを最大限に活かさせていただきますよう、よろしくお願い致します。2点目として、例年好評だったプレシンポジウムを実施しないこととします。これは、この時間を使ってポスター発表フラッシュトークを充実させようという狙いによるものです。ご理解いただきますよう、よろしくお願い致します。そのほかについては、ほぼ昨年通りのスケジュールで開催しようと考えております。

申込み締切は 11月5日（金）です

- ※ ポスター発表要旨の登録は 11月15日（月）
- ※ 当日参加は受け付けませんので、ご注意ください

今回のシンポジウムのメインテーマは、「保全ゲノミクス」と「博物館標本」です。実行委員会企画のミニシンポジウムでは、希少種保全などに用いることのできる最新のゲノミクス解析の活用事例を紹介し、これまでにはなかった情報に基づく新たな保全対策の考え方について議論する予定です。和文誌編集委員会企画のシンポジウムでは、博物館標本に眠る情報を最新技術によって活用する Museomics を中心とした最新研究を紹介していただきます。いずれも、多くの参加者の方々に新たな研究展開の可能性を感じていただける機会になると期待しています。

ポスター発表では、昨年同様に30秒程度で発表内容を紹介するフラッシュトークを行うこととし、短い時間ではありますが全ての発表者にオンラインでご登壇いただきます。これにより、発表全体を効率的に俯瞰することができ、その上でさらにポスター発表コアタイムにおいて、発表者とオンラインで議論を深めていただくこととなります。懇親会についても、昨年同様にオンラインでの開催を計画しています。直接顔を合わせて懇親を深めることのできないのは残念でありませんが、少しでも有意義な議論・

交流につながるよう、精一杯の準備をさせていただきます。
オンライン開催ではありますが、種生物学会らしいシン
ポジウムになるよう、実行委員会一同準備を進めてまいり

ますので、是非とも多くの方にご参加いただき、盛会とな
るようご協力いただきますよう、よろしくお願いいたしますま
す。

● 開催方法

Zoom: 委員会、シンポジウム、授賞式、受賞講演、懇親会 (検討中)

LINC Biz: ポスター発表コアタイム

※ 開催方法については今後、一部変更する可能性があります。

● 全体のスケジュール (変更になる場合があります。最新の情報は参加者へ電子メールによりお知らせします)

12月3日 (金)

10:30-16:00 各種委員会
16:30-17:30 ポスター発表フラッシュトーク (一人 30 秒)
17:30- 自由時間 (LINC Biz ポスター閲覧など)

12月4日 (土)

9:00-10:00 片岡奨励賞授賞式・片岡奨励賞受賞講演
10:10-12:10 ポスター発表 (コアタイム奇数) LINC Biz
12:10-13:00 休憩
13:00-15:00 ポスター発表 (コアタイム偶数) LINC Biz
15:30-17:10 **実行委員会企画ミニシンポジウム「植物保全ゲノミクスの最前線」** 企画者: 陶山佳久 (東北大学)・井鷲裕司 (京都大学)
17:20-18:20 総会
18:20-19:00 休憩
19:00- 懇親会

12月5日 (日)

9:00-10:00 PSB 論文賞・ポスター受賞者授賞式
10:00-12:30 **和文誌編集委員会企画シンポジウム「過去、現在、未来をつなぐ博物館標本—Museomics から挑む生物多様性研究のブレイクスルー」** 企画者: 中濱直之 (兵庫県立大学)・岩崎貴也 (お茶の水女子大学)・中臺亮介 (国立環境研究所)・大西亘 (神奈川県立生命の星・地球博物館)
12:30-13:30 休憩
13:30-17:00 **和文誌編集委員会企画シンポジウム (つづき)**

● 実行委員会企画ミニシンポジウム「植物保全ゲノミクスの最前線」

12月4日 (土) 企画者: 陶山佳久 (東北大学)・井鷲裕司 (京都大学)

絶滅危惧種の保全など、生物多様性の保全対策のために用いることのできる生物学的情報を取得するためには、近年における技術革新の著しいゲノミクス技術が極めて有効なものとして注目されている。従来の典型的な保全遺伝学的研究では、例えば集団遺伝学的・分子系統地理学的なデータに基づく保全単位の認識や、遺伝的多様性の評価、有効集団サイズ・近親交配の程度の把握などが主要な情報として活用されてきた。しかし、近年のゲノミクス技術を駆使することで、例えば過去からの有効集団サイズの変動の推定などだけでなく、ゲノム中に蓄積された有害変異蓄積量や発現遺伝子の多様性、重複遺伝子含有率などを把握することができ、これらの情報に基づくゲノムとしての保全難易度や環境適応能力を評価する手法が考え出されている。本シンポジウムでは、これらの最新手法を駆使した希少種保全ゲノミクスの最新研究事例を紹介し、ゲノミクス技術の新たな活用方法を展望するとともに、全く新しいタイプの生物多様性保全の考え方について議論します。

- 15:30–15:50 「希少種保全に応用できるゲノム解析技術とその適用プロジェクトの概要」
陶山佳久（東北大学）・井鷲裕司（京都大学）
- 15:50–16:20 「RNAseq 解析による希少植物のゲノム診断」
牧野能士（東北大学）
- 16:20–16:50 「ゲノム情報に基づくテラメイド生物多様性保全」
井鷲裕司（京都大学）
- 16:50–17:10 総合討論

● 和文誌編集委員会企画シンポジウム「過去、現在、未来をつなぐ博物館標本—Museomics から挑む生物多様性研究のブレイクスルー」

12月5日（日） 企画者：中濱直之（兵庫県立大学）・岩崎貴也（お茶の水女子大学）・中臺亮介（国立環境研究所）・大西亘（神奈川県立生命の星・地球博物館）

各時代各場所の生物多様性情報の証拠となる博物館標本は、未来に向けて保存すべきタイムカプセルといえます。これまでに既に百年以上、場所によっては数百年以上にわたって多くの標本が収集され、各地の大学や博物館の管理者によって大切に保存されてきました。このように蓄積された博物館標本は、過去の様々な時代の情報へのアクセスや歴史的変化の観察までを可能にします。近年の遺伝子解析技術の向上によって、博物館標本が内包する過去の情報へのアプローチは比較的容易となっており、その情報活用はMuseomicsとして今や世界的に注目されています。このように博物館標本は、新規の科学的知見を生み出しうる多くの可能性を有しています。本シンポジウムでは特に遺伝情報に注目し、系統解析やデータサイエンス、保全などの多角的な視点から、標本の持つ情報の活用に挑まれる研究者の皆様にご講演をお願いし、博物館標本の利用可能性を探りたいと考えています。

- 10:00–10:15 趣旨説明 中濱直之（兵庫県立大学）
- 10:15–10:45 「生物標本の学術的、社会的価値」
伊藤元己（東京大学）
- 10:45–11:15 「標本 × 学術情報の流通ハブとしての博物館」
大西亘（神奈川県立生命の星・地球博物館）
- 11:30–12:00 「Museomics：標本データと配列データの連携への挑戦」
仲里猛留（情報・システム研究機構）
- 12:00–12:30 「博物館標本は地域の自然のシードバンクとなり得るか」
志賀隆（新潟大学）
- 13:30–14:00 「標本のゲノムが物語ること：博物館におけるゲノム研究」
岸田拓士（ふじのくにミュージアム）
- 14:00–14:30 「東南アジア植物の多様性研究における DNA バーコーディング」
遠山弘法（国立環境研究所）
- 14:30–15:00 「鳥類の剥製標本を用いた保全遺伝学的研究」
表溪太（北海道博物館）
- 15:15–15:45 「昆虫標本からのミトコンドリアゲノムの構築」
長太伸章（国立科学博物館）
- 15:45–16:15 コメント
中臺亮介（国立環境研究所）・首藤光太郎（北海道大学）・岸本圭子（新潟大学）
- 16:15–17:00 総合討論

● **参加・ポスター発表申し込み【11月5日（金）まで】**

参加申し込みフォーム (<https://forms.gle/CG1uj9f69wJND1Q49>) からお申し込みください。

- 今回のシンポジウムは、種生物学会員に限って参加申込みを受け付けます。**参加費は無料**です。
- 非会員の方は、事前に種生物学会への入会をお済ませください。入会手続きは、種生物学会ホームページから行うことができます。ホームページの入会案内にしたがって、今年度分の会費（一般会員 6,000 円／学生会員 3,000 円）を **11月5日（金）までにお振り込みください**。会費の振り込みが確認できない場合は、参加申込みをキャンセルさせていただきます。
- ポスター発表を希望する方は、参加申し込みフォームで「ポスター発表を申し込む」にチェックをしてください。**ポスター発表の申込者（発表者）は、2021 年度分の種生物学会会費を納入済の会員に限ります**。
- ポスター発表が優れていた発表者（学生会員）には、「種生物学会ポスター賞」および「河野昭一ポスター賞」を授与しています。ポスター賞に応募される方は、参加申し込みフォームで「ポスター賞へ応募する」にチェックをしてください。「河野昭一ポスター賞」は、発表者を学部学生および修士課程の大学院生に限定したポスター賞です。
- シンポジウムへの当日参加は出来ません。また、締切後の変更には対応いたしません。

● **ポスター発表要旨の登録【11月15日（月）まで】**

- 発表要旨は、テンプレートファイル（MS Word 形式）を用いて作成してください。テンプレートファイルは、参加申し込みの際に自動返信される電子メールに記載された URL からダウンロードできます。
- 参加申し込みの際に自動返信される電子メールに記載された URL からファイルをアップロードしてください。

● **ポスター発表について**

- 初日（12月3日）の 16:30 より、発表内容を PDF スライド 1 枚にまとめて 30 秒で紹介する「フラッシュトーク」の時間を設けます。**12月1日（水）までに PDF スライドをご準備ください**。後日、PDF ファイルのアップロード先をお知らせします。
- LINC Biz のチャンネルが発表ブースとなります。LINC Biz にポスターを画像形式でアップロードし、チャットおよびビデオ会議で質疑応答を行うことができます。ポスターのダウンロードは出来ませんが、スクリーンショットを撮影される危険性は排除できません。

● **要旨集について**

今年度はオンラインでの開催となるため、冊子体の要旨集を発行しません。参加者には、電子媒体の要旨集がダウンロードできる URL をご連絡します。

● **第 53 回種生物学シンポジウム実行委員会**

陶山佳久（東北大学大学院農学研究科）

問い合わせ先：sssb53symposium at gmail.com（at を@に置き換えて下さい）

第 52 回 種生物学シンポジウム (滋賀) の記録

2020 年 12 月 4 日 (金) ~ 6 日 (日) オンライン

プレシンポジウム

高林純示 (京都大・生態学研究センター) 昆虫と植物の会話を
解説する

片岡奨励賞受賞講演会

村中智明 (鹿児島大) リズムと同期の種生物学

実行委員会企画ミニシンポジウム「分子が切り開く動植物の適応 進化」

企画者: 本庄三恵 (京都大)・工藤洋 (京都大)
本庄三恵 (京都大) 趣旨説明
石川麻乃 (国立遺伝学研究所/東北大) トゲウオから探る生活史
の収斂進化の鍵遺伝子
清水健太郎 (チューリッヒ大学/横浜市立大学) シロイヌナズナ
近縁種のゲノム情報を利用した適応進化の解析
総合討論

和文誌編集委員会企画シンポジウム「食べられないために守る 術—植物の多様な対被食者防御戦略」

企画者: 坂田ゆず (秋
田県立大)・角田智詞 (京都大)
坂田ゆず (秋田県立大) 趣旨説明
中村誠宏 (北海道大) 森林の 3 次元構造が植物と昆虫の相互作
用に与える影響
鈴木亮 (琉球大学) 昨日の味方は今日の敵—被食防御形態の進
化で変わる植物間相互作用
山尾僚 (弘前大) 植物による共生者の行動操作
吉永直子 (京都大) 脂肪酸—アミノ酸縮合物をめぐる昆虫と植
物の攻防
樋口裕美子 (神戸大) オトシブミが利用しにくい葉の形: 葉形
が植食者に与える影響と防衛としての可能性
山崎一夫 (大阪健康安全基盤研究所) 植物の視覚による対植食
者防御
角田智詞 (京都大) 地下部も含めて考える植物防衛研究の行
方: 地上部と地下部の共通点と相違点、その連携
総合討論 (コメンテーター: 佐藤安弘)

ポスター発表

青柳優太 (九大・システム生命)・楠見淳子 (九大・比較社会文
化)・佐竹暁子 (九大・理) 樹木の DNA 修復: データベースを
用いた植物多種間の DNA 修復遺伝子コピー数比較
内藤健 (農研機構) ナノポアを使ったゲノムの読み方
池田光一 (香川大・教育)・掛澤明弘 (対馬市役所)・篠原渉 (香
川大・教育) 花卉の表皮細胞をすべて数えてみた—葉が特殊な
細胞レベルの小型化形質を示す屋久島の高山性ミニチュア植
物ヒメコナスビの、一見すると低地のコナスビと違いがない花
弁の、細胞のサイズと数に関する研究—
富田幹次 (北海道大・環境) 冬虫夏草エンワセミタケの奇妙な生
態
星野美紀 (東京学芸大・院・教育)・堀江佐知子 (東北大・院・生
命)・牧雅之 (東北大・植物園)・堂園いくみ (東京学芸大・教
育・環境科学) カタバミ長花柱型が維持されている要因: 異型
間交配雑種の生存と稔性
小林千浩・布施静香 (京都大・院・理・植物)・Manop Poopath
(タイ DNP・BKF)・Rachun Pooma (タイ DNP・BKF)・楊
永平 (中国科学院・昆明植研)・田村実 (京都大・院・理・植物)
コショウ目の分岐年代推定? マノズクサ属、コショウ属、サ

ダソウ属の新旧両大陸間移動は鳥による長距離散布かベーリ
ング地域経由か??
高添清登 (熊本大・院・自然科学)・伊藤元己 (東京大・院・総合
文化)・副島顕子 (熊本大・院・先端科学) 葉緑体全ゲノムを用
いたシオン属における系統解析
平松勲悦・松本哲也 (岡山大・院・環境生命)・末吉昌宏 (森林総
研)・宮崎祐子・廣部宗 (岡山大・院・環境生命) 岡山県北部に
分布する広義マムシグサにおける訪花昆虫相と形態に基づく
隠蔽種の探索
新宅和憲・布施静香・高山浩司 (京都大・院・理・植物)・傳田哲
郎 (琉球大・理・海洋自然科学)・田村実 (京都大・院・理・植
物) 倍数化に伴って網状進化した種をどう捉えるか?—ヤブラ
ン属 (クサスギカズラ科) の場合—
中濱直之 (兵庫県大/兵庫県博)・朝井健史 (姫路市植物園)・松
本修二 (姫路市植物園)・末次健司 (神戸大)・倉島治 (科博)・
松尾歩・陶山佳久 (東北大) 湿生絶滅危惧種サギソウにおける
遺伝子汚染株の検出と分散リスク推定
石井直浩・巻島大智 (横国大・環境)・廣田峻・松尾歩・佐藤光彦・
陶山佳久 (東北大・農)・佐々木雄大 (横国大・環境) 青森県八
甲田山系におけるスマガヤの遺伝的多様性と過去・現在の湿原
面積の関係
西脇亜也・前田恵未 (宮崎大・農) UAV 空撮写真を用いたスギ人
工林内における絶滅危惧種の 3D 分布図作成
前田恵未・西脇亜也 (宮崎大・農) 絶滅危惧種キレンゲショウマ
の受粉様式について
宮本佳奈 (横浜国立大・教育・理科)・山本将也 (兵庫教育大)・
倉田薫子 (横浜国立大・教育・理科) 絶滅危惧植物チヂブイワ
ザクラの保全に向けた遺伝的多様性の解析
永光輝義 (森林総研) 異なる気候環境へのミズナラの種苗移動が
生育と交配および次世代の生育に与える影響
宮本実穂・大原雅 (北海道大・環境科学) 外来植物ハイミチヤナ
ギの侵入・定着に関わる生活史特性と環境要因の解明
木村富至 (福井県立大・生) 若狭湾沿岸ホシミスジ 2 亜種の環境
から検証した形態差と分布の考察
勝原光希・佐藤弘大 (岡山大・環境生命)・兵藤不二夫 (岡山大・
異分野コア)・宮崎祐子 (岡山大・環境生命) 花びらは使い捨て
の消耗品か? 一年生草本ケツクサを用いた花資源回収の可
能性の検証
安藤葉生 (立命館大・院・生命科学)・荒木希和子・久保幹 (立命
館大・生命科学) コンロンソウ地下茎の挙動と防御器官の関係
解析
中田泰地・丑丸敦史 (神戸大・発達) 都市—里山水田環境におけ
るツクサの機能形質の種内変異
都築洋一・高田壯則・大原雅 (北海道大・院・環境科学) 遺伝的
多様性と適応進化速度のトレードオフに着目した生活史戦略
の存続可能性解析
後藤良祐 (横浜国立大・院・教育)・倉田薫子 (横浜国立大・教育・
理科) ミズヒキの斑紋の有無における地理的構造とその要因の
検討
村中智明 (鹿児島大・農)・工藤洋 (京都大・生態研)・小山時隆
(京都大・理) 日本産アオウキクサの集団内・集団間における
形質相関
増田佳奈・中田泰地・佐藤秋周・丑丸敦史 (神戸大) 混雑種ツク
サにおける大きな花でみられる先行自家受粉の適応的意義
河合良弥 (京都大・農)・津野彩子 (森林総研)・陶山佳久 (東北

- 大・農)・Gildas Gâteblé (Institut Agronomique Néocalédonien)・井鷺裕司 (京都・農) PSMC法によるニューカレドニア準固有 *Oxera* 属 (シソ科) 24種の過去の個体群動態比較
- 宇敷京介・川窪伸光 (岐阜大・院・自然科学技術) ツリフネソウの花器形態：集団間から個体内のレベルまでの変異
- 吉田直史 (東北大・生命)・森長真一 (日大・生物資源)・若宮健・石井悠 (東北大・生命)・久保田涉誠 (東大・総合文化)・彦坂幸毅 (東北大・生命) ハクサンハタザオの標高適応解析：中間標高帯における選択が適応分化に影響するか？
- 芳賀奨平・大原雅 (北海道大・院・環境科学) 開花個体サイズが異なるオオウバユリ集団間での開花個体の成長の差の有無
- 柿嶋聡 (科博・分子セ)・梁珣碩 (江蘇中科院植物研究所)・楊宗愈 (台湾国立自然科学博物館)・呂佩倫 (台湾国立台東大) 台湾における新たな周期的一斉開花種の発見
- 大野美涼・山尾僚 (弘前大・農生) 異なる光環境に生育する落葉樹4種の比較から探る枝による光受容の役割
- 野村康之 (龍谷大・食農研)・永野惇 (龍谷大・農) 年変動を再現した人工気象器内におけるシロイヌナズナの遺伝子発現パターンと生産果実数
- 湯本原樹・西尾治幾 (京都大・生態研)・村中智明 (京都大・生態研/鹿兒島大・農学)・杉阪次郎・本庄三恵・工藤洋 (京都大・生態研) 常緑草本ハクサンハタザオの葉寿命の季節的可塑性および遺伝子発現解析
- 西尾治幾 (京都大・生態研)・永野惇 (龍谷大・農)・伊藤佑 (京都大・生態研)・鈴木穰 (東京大・新領域)・工藤洋 (京都大・生態研) 遺伝子の進化的保存性と季節的な制御の関係
- 田中葉月・立木佑弥・鈴木準一郎 (東京都立大・生命) 石のマルチングと給水によって土壌水分量は変化するか？
- 磯田珠奈子・伊藤照悟・小山時隆 (京都大・理) ウキクサ植物 *Wolffiella hyalina* のサリチル酸誘導性花成経路の解析
- 小林知里・河田雅圭 (東北大・生命科学) 「葉を切り落とした茎に産卵」するハムシとゾウムシ：行動の適応的意義の種間比較
- 高野 (竹中) 宏平 (長野県環境研)・佐藤光彦 (東北大・院・農)・黒江美紗子 (長野県環境研・自然保護課)・尾関雅章 (長野県環境研) ツキノワグマによるナベクラザゼンソウの葉の被食の初報告
- 小寺泰聖 (弘前大・農生)・大崎晴菜 (岩手大・連農)・山尾僚 (弘前大・農生) モモコフキアブラムシはなぜ粉吹くのか？～寄主植物の表面構造と生育環境から迫る～
- 大崎晴菜 (岩手連大)・木村彰宏 (岩手連大)・山尾僚 (弘前大・農生) 木を食べるハムシと草を食べるハムシの違い～外部形態と食性幅に着目して～
- 鈴木虎太郎・坂田ゆず (秋田県立大・生物資源) シカの嗜好性植物種が近隣植物の被食率に影響するメカニズムの検討
- 内田葉子・大原雅 (北海道大・院・環境科学) 花食者ゴマシジミの食害に対する宿主植物ナガボノシロワレモコウの果実生産における繁殖補償
- 萩原幹花 (京都大・農)・石原正恵 (京都大・フィールド研)・鹿島誠 (青山学院大・理工/龍谷大・農)・栗田悠子・永野惇・塩尻かおり (龍谷大・農) トランスクリプトームからみるブナの傷害及び揮発性化学物質の受容応答
- 櫻井裕介・石崎智美・栗原桃香 (新潟大・院・自然) ツバキは匂いを用いた植物間コミュニケーションを行うのか？
- 手嶋琢・府内里紗 (山口大・創)・中沢威人・本田与一 (京都大・農)・肥塚崇男・松井健二 (山口大・創) 担子菌ウシグソヒトヨタケ1-オクテン-3-オール生合成経路およびその生理・生態学的意義の解明
- 手嶋琢 (山口大・創)・府内里紗 (山口大・創)・中沢威人 (京大・農)・本田与一 (京大・農)・肥塚崇男 (山口大・創)・松井健二 (山口大・創)
- 野宮陸・大野美涼・山尾僚 (弘前大・農生) 植物間の競争はネナシカズラの寄生のチャンスを増やすか？
- 寺田郁香 (北海道大・環境科学)・内海俊介 (北海道大・FSC) 外来植物の地下部の無性繁殖形質は近隣個体の種内遺伝的特性の認識によって変化する
- 塚原一颯・土田浩治・川窪伸光 (岐阜大・連農) アザミウマはどんな花を好むのだろうか？
- 渡部俊太郎 (鹿兒島大)・前迫ゆり (大阪産業大) 照葉樹林原生林における近縁樹種の共存とその空間スケール依存性
- 長谷川佳代・川窪伸光 (岐阜大・院・自然科学技術) つる植物は自個体によじ登るのか？
- 栗原桃香 (新潟大・院・自然科学)・櫻井裕介・石崎智美 (新潟大・理) ヨモギとカワラヨモギにおける揮発性物質を介した個体内・個体間の情報伝達の検証
- 武田和也・酒井章子 (京都大・生態研) 植物群集内で花微生物はどの様に共有されているか
- 田路翼・石本夏海・近藤輝留・市野隆雄 (信州大・理) アザミ属2種においてハナバチは花粉集めを忌避する
- 星野佑介 (東京学芸大・院・連合)・堂園いくみ (東京学芸大・教育・環境科学) カラスウリ属4種の開花特性と花形態の種間比較
- 山口真利枝 (筑波大・生物)・大橋一晴 (筑波大・生命環境) 花たちの水際作戦：動物媒花の形態が異種花粉の受けとりやすさに及ぼす影響
- 工藤葵 (京都大・農)・杉原優 (京都大・農/岩手生工研)・太田敦士 (京都大・農)・寺内良平 (京都大・農/岩手生工研) 雌雄異株植物オニドコロにおける昆虫誘因の雌雄差
- 川上風馬 (神戸大・国際人間)・松本哲也 (岡山大・院・環境生命)・中田泰地・矢井田友暉 (神戸大・人間発達)・大西麻衣 (神戸大・国際人間)・丑丸敦史 (神戸大・人間発達) 斜面に生育するテンナンショウ属植物の花序の向き
- 松本哲也・廣部宗 (岡山大・院・環境生命)・末吉昌宏 (森林総研)・宮崎祐子 (岡山大・院・環境生命) テンナンショウ属5種に訪花するキノコバエ類の種特異性と生殖隔離としての潜在的機能
- 渡津友博 (広島大・国際協力)・保坂哲朗 (広島大・先進理工)・井上雅仁 (三瓶自然館)・三島秀夫 (三瓶自然館)・丑丸敦史 (神戸大・人間環境) 島根県赤名湿地における訪花昆虫群集と送粉シンドローム
- 高村紀行・川窪伸光 (岐阜大・院・自然科学技術) 開花直前の花芽内で、花器官はどのように折りたたまれているのか？
- 望月昂・Ayman Khamis Elsayed・川北篤 (東京大・植物園) オオカモメヅルにおける新しい Brood-site pollination
- 高橋空・芳崎優香 (北海道大・院・環境科学)・塩尻かおり (龍谷大・農)・大原雅 (北大・院・環境科学) コウライテンナンショウの雌雄個体間の花粉授受メカニズム—雌雄における匂いと個体サイズの違いに着目して—
- 五島美穂 (京都大・理)・木下覺 (鳴門市)・多田内修 (九州大・理)・田村実・布施静香 (京都大・理) 四国産コバイモ節 (ユリ科バイモ属) 植物の訪花昆虫観察 (予報)
- 渡邊誠太 (京都大・院・理)・林一彦 (大阪学院大)・荒川克郎 (荒川リリファーム)・布施静香・田村実 (京都大・院・理) ユリ属 (ユリ科) 植物の花被片向軸側基部に見られる畝状構造とそれが訪花昆虫の行動に与える影響
- 奥山雄大 (科博・植物園)・柿嶋聡 (科博・分子多様性センター)・水野貴行 (科博・植物園)・仲里猛留 (DBCLS) 「擬態する花」の研究モデルとしてのカンアオイ属
- 菅原早紀・川窪信光 (岐阜大・応生) 日本に生息する淡水性カメ類による種子散布の可能性探索～糞分析から得られた知見～

柴村奈緒子 (鹿児島大・農)・古本良 (林木育種)・内貴章世・梶田忠 (琉球大・熱生研)・工藤洋 (京都大・生態研) 海岸植物クサトベラの集団間および二型間で果実形態変異が生じる要因

ポスター賞受賞者

<種生物学会ポスター賞>

都築 洋一 (北海道大)
大野 美涼 (弘前大)
高村 紀行 (岐阜大)
小寺 泰聖 (弘前大)

<河野昭一ポスター賞※>

小寺 泰聖 (弘前大)
※ 筆頭発表者を学部学生と大学院生 (修士) に限定した奨励的ポスター賞です。



ポスター賞受賞者によるシンポジウム参加記

第52回シンポジウムでポスター賞を受賞された方々の中から、都築洋一さんと大野美涼さんに、参加記を寄稿していただきました。

都築洋一さん (北海道大学)

私が種生物学シンポジウムに参加するのは、前々回の八王子大会から続けて3回目でした。今年度 (2020年度) はコロナウイルス蔓延で例年とは全く違う社会情勢になりました。そのような中でシンポジウムが開催され、研究発表・交流の機会を頂けたことに、感謝いたします。

種生物学シンポジウムは、対面での熱い議論が印象強いですが、個人的には今回のオンライン形式も非常に充実したものになりました。その大きな理由は、各発表で繰り広げられている議論を自分のペースでフォローできたことです。今大会は、植物-動物の捕食被食関係や生活史進化の遺伝基盤をはじめとする多岐にわたるトピックが扱われていました。発表内容そのものに加えて、Zoomのチャットでの議論やLINC Bizでの質疑応答をじっくり追うことで、私が持っていなかった多くの視点に触れることができ、非常に勉強になりました。と同時に、なぜそのような視点で問かけが発せられるのか、どうすればその視点の気付けるのか、考えさせられ、刺激を受け、研究のモチベーションを得ることができました。

今大会、私はポスター発表をしました。私はオオバナノエンレイソウという多年生植物を用いて、生活史の種内変異が生まれる原因やその遺伝的帰結について研究しています。今年度はコロナの影響で野外調査を思うように進められなかったこともあり、数理的なアプローチで研究しました。発表では、論理展開に関して数多くの重要な指摘を頂けたうえに、実際の野生集団との整合性を

図るという観点から、今後の発展性について議論できました。深く感謝いたします。頂いたコメントを踏まえて、内容をより洗練させていきたいと思っています。この原稿を書いている時点では未だコロナ終息の兆しが見えていませんが、オンラインでも非常に濃く有益な時間を過ごせたことで、研究に対する意欲が改めて湧きました。この気持ちを糧に引き続き研究に邁進していきたいと思っています。

大野美涼さん (弘前大学)

種生物学会史上初めてのオンライン開催となった今回のシンポジウム。例年のような合宿形式での交流はかきませんでした。多彩な研究に触れることができ、とても刺激的な3日間でした。実行委員会企画シンポジウム「分子が切り開く動植物の適応進化」では、野生種を対象として、その行動や環境応答の鍵になる遺伝子にせまった研究が紹介されました。遺伝子や分子レベルでの研究の多くはモデル生物を対象としている印象を強く持っていましたが、本公演を聞いてそのイメージが覆されました。また、遺伝子レベルの検証から、野外での機能や適応進化に結び付けられていくさまに圧倒されました。和文誌編集委員会企画シンポジウム「食べられないために守る術—植物の多様な対被食者防御戦略—」では、それぞれ着眼点やアプローチが様々な研究に触れることができ、多角的な視点で考える面白さを改めて感じる事ができました。植物の被食防御研究のさらなる広がりを予感するとともに、自身の研究についても様々な観点から考えを巡らせるきっかけをいただきました。

今回のシンポジウムで、私は修士課程までの研究成果を

ポスター発表させていただきました。私は、落葉樹が冬から春にかけて行う日長認識を題材に研究をしており、今回は冬季の日長認識の際に落葉樹は冬芽と枝で光を受容していること、各器官への依存度は樹種ごとに異なり、各種が生育している光環境と相関があることを発表させていただきました。本研究を多くの方々にご紹介し、議論していただけたことをとても嬉しく、光栄に思います。本研究発表をポスター賞に選考してくださいました審査員の方々や、研究に対するご助言をくださいました方々に、心より御礼申し上げます。皆様との議論を通じて感じた高揚感を励みにして、自然と真摯に向き合う姿勢を大切に、味わい深い研究を目指して精進して参ります。

最後になりますが、オンライン開催となった本シンポジウムですが、チャットやコメント欄を通じて活発な議論が行われており、例年ポスター会場などで交わされる“種生物学会らしい”熱い議論は、合宿形式という学会のスタイルのおかげだけではなく、参加されている会員の皆様の研究を楽しむ姿勢や、学生も気さくに議論できるような雰囲気のおかげなのだと思えました。先行きの見えない情勢の中、研究発表、交流の機会をいただきました実行委員の皆様、学会事務局の皆様にご心から御礼申し上げます。

第18回 男女共同参画学協会シンポジウム参加報告

堂園いくみ (男女共同参画担当)

新型コロナの影響で、例年10月に行われるシンポジウムはZoom開催となりました。Zoom開催となったことで、種生物学会からは4名(主に子育て中の学会員)が参加することができました。シンポジウムのテーマは、「女性研究者・技術者の意志・能力・創造性を活かすために～女性リーダーが例外ではない社会をめざして～」でした。

2020年10月17日(土) 10:00～17:40

<https://www.djrenrakukai.org/symposium1.html>

講演2「キリングループの多様性推進とキャリア形成について」神崎夕紀さん

キリングループの多様性を重視し、多様性を活かす理念のもと、その取り組みが紹介されました。女性社員のキャリアアップを前提に、20代の頃から様々な経験をさせて教育し、ライフイベントを考えたキャリアアップのルートを示していました。また、結婚していない、子供もいない社員に、育児中の経験(子供が熱を出したので早退する、出社できない)をさせる「なりキリン」という取り組みが紹介されました。育児中は突然の子供の対応が多く、なかなか言いにくいこともあり周りに気を使います。「なりキリン」のような取り組みで、何に困っていて、何をしてもらえると助かるかといった「現実感」を共有でき、相互理解(共感)が深まることが期待できると思えました。

特別企画「緊急事態宣言による在宅勤務中の科学者・技術者の実態調査報告」志牟田美佐さん

緊急事態宣言下の5月15日から6月13日に実施されたアンケート調査結果の報告でした(HPでも見ることができます*1)。研究室の使用制限や試料の損失、野外調査の制限によって、研究に対する不安が大きかったことが示されました。また、任期付き立場の若手研究者や学生に大きな不安があることが示されました。在宅となったことで、家事や育児の負担が増えたことで勤務に支障があると答えた人は、女性に多かったようです。私も小学校が休校になったことで、負担増を強く感じました。また、大学から野外調査の自粛要請があったため研究費を使って調査ができないことへの不安は大きかったです。大学内の事務手続きは省略化されてかなり楽になりましたが、オンライン授業の負担は大きくなりました。一方で、自宅からでもできること、野外調査で出張してもオンデマンドであれば休講にする必要がなく、良い点はこれから取り入れていくことが必要だと思いました。

基調講演1「男女共同参画はゴールかツールか？」上野千鶴子さん

男女共同参画が何のための取り組みかというところが、必ずしも明確にはなっていないという指摘でした。理念は理解していても、具体的に何をするのかという発信が必要なのかもしれません。近年の女性リーダーの活躍から、女性が得意とする「共感力」が、リーダーに必要な決断力と対極にあるのではなく、むしろ同じベクトルであるというお話がありました。女性リーダーが科学的な情報を元にコロナ対策を講じ、国民の共感を得ていたこともその一例だと感じました。意思決定の層に女性が入っていることは重

要なことであり、様々な組織の男女共同参画担当（子育て経験のある女性が多い）に男性はもちろん、様々な立場（介護や不妊治療や病気を抱えている方）の方々も担当することで、相互理解と寛容さが醸成されると思います。

基調講演3「ポストコロナ社会の男女共同参画」渡辺美代子さん

女性限定公募で採用された人は、限定しない公募に比べて実績をあげているというお話がありました。輝く女性研究者賞を受賞した群馬大学の例も示されました。女性限定公募は、採用側・応募側の両方から異論がでることも多いですが、このような実績（エビデンス）を示していくことにより理解が広がることを期待します。女性限定公募では、採用後の立場に不安があり、女性が応募を控える場合もあるという話もあり、上野さんからは、もっと自信を持って応募すべきだという応援がありました。

近年 RPD という出産育児中の研究者（男性も可）への支援制度がありますが、RPD 終了後にポストについた人の割合が男性より女性の方が低いこと、さらに学振 PD より低いことが報告されました。また、博士課程の女性比率

よりも助教の女性比率が低いことから、結婚出産育児というライフイベントによって、研究から離れる割合が高いことがうかがえます。当学会でも、任期付きで出産育児となった場合、研究環境に戻れるのかという不安を持つ声が聞かれます。ロールモデルは必ずば抜けた能力をもった人やうまくいった例が紹介されがちですが、個人によって事情が異なるため、そのまま適用できるモデルはありません。当事者が多様な選択肢があることや使える制度・サポート制度について共有し、情報交換と問い合わせができるような場が必要であり、今後、学会はその役割を担っていくことを考えていく必要があると思います。最近、若手の学会員の方で収入の問題や、ライフイベントをきっかけに、退会される方もおられます。将来会員に復帰することを念頭に「休会」制度があれば、研究活動へ戻れないのではという当事者の不安の軽減に繋がると思います。

*1 https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2020/survey_covid-19/index.html

<この参加報告は、学会ウェブサイトにも掲載しています>

これまでの会員数の推移

富松 裕（庶務幹事）

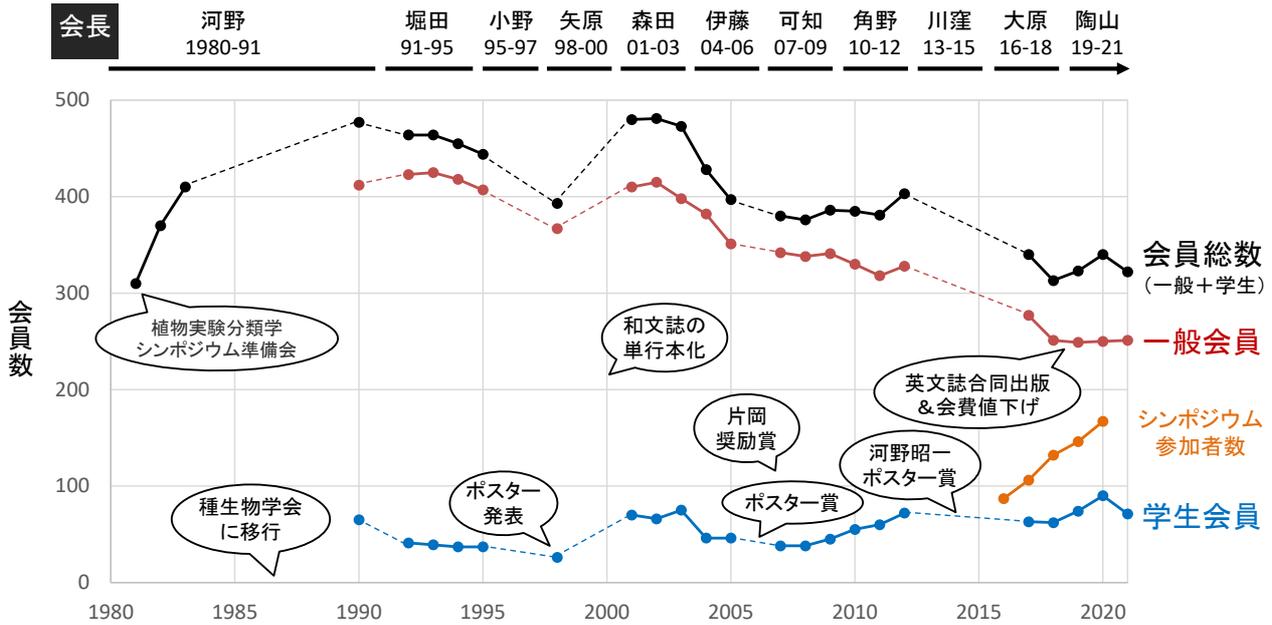
種生物学会の将来計画を検討するための資料として、過去のニュースレターから、会員数の変遷をまとめました。昨年度の総会でもご説明したのですが、ニュースレターにも記録として掲載したいと思います。

私が初めて種生物学シンポジウムに参加した1998年には、会員数（特に学生会員数）の減少が課題となっていました。この年に行われた第30回のシンポジウムでは開催時期が12月に変更されるとともに、新たにポスターセッションを行う試みがなされています。まだ当時は、会場の片隅に数枚のポスターボードが並ぶだけでしたが、多くの方々にポスターを見ていただいたことを思い出します。当時、もう一つ推し進められたのが和文誌の単行本化でした。その後、会員数は回復しますが、2000年代になると再び減少したことが読み取れます。次に学生会員数が増加に転じた2006年頃は、ポスター賞や片岡奨励賞が設けられた

時期と一致しています。今では、多数の学生会員によってポスター発表が活発に行われるようになり、シンポジウムにおける一大イベントとなっていることは、ご承知のとおりです。

それに対して、一般会員は2002年以降、概ね減少を続けています。しかし、年会費を値下げした2019年から、それまでと比べて一般会員数が下げ止まっており、最近3年間は250名前後で推移しています。また、2016年以降にシンポジウム参加者数が顕著に増加していることも、特筆すべき傾向です。学会にとって明るいニュースだと言えますが、この傾向が今後も続くのか、もうしばらく注視する必要があります。

間もなく選挙が行われ、来年度からは新しい執行部となりますが、今後、幹事会等で将来計画を議論する1つの材料になれば幸いです。



※ ニュースレターより作成しました。海外・機関・名誉会員は含みません。

事務局からのお知らせ

新しい和文誌が発行されました—和文誌「花と動物の共進化をさぐる：身近な野生植物に隠れていた新しい花の姿」（種生物学研究第40・41号）が9月に発行されました。本号は2017年・2018年事業ですが、これらの年に会員資格を持っていた方に限らず、2019年以降に新規入会された会員にも送付されることになっております。該当する方でお手元に届いていない場合は、事務局までお問い合わせください。

2019年度片岡基金決算報告に誤りがありました—昨年のニュースレター52号において、2019年1月1日～11月30日までの決算報告を誤って掲載してしまいました。12月31日までの正しい決算報告は右のとおりです。お詫びして訂正します。

電子メールアドレス更新のお願い—種生物学会では、さまざまな情報を電子メールで配信しています。メッセージが届かない方は、電子メールアドレスが登録・更新されておきませんので、事務局までご連絡ください。

事務局の連絡先は office@speciesbiology.org です

【訂正】

2019年度片岡基金決算報告
(期間：2019年1月1日～12月31日)

収入の部	収入額
利息	4
前年度繰越金	492,075
合計	492,079

支出の部	支出額
片岡奨励賞副賞	50,000
PSB論文賞副賞(楯)	11,550
PSB論文賞副賞(楯)送付代	1,820
振込手数料	330
次年度繰越金	428,379
合計	492,079

(庶務幹事 富松 裕)

会計報告

種生物学会 2020年度 決算 期間：2020年1月1日～12月31日

収入の部	予算額	決済額
会員会費	1,600,000	1,709,000
購読料	20,000	6,000
バックナンバー	10,000	4,500
著作権料	100,000	124,438
PSBロイヤリティ	500,000	0
その他(利息など)	20,000	29,010
小計	2,250,000	1,872,948
前年度繰越金	8,154,559	8,154,559
合計	10,404,559	10,027,507

支出の部	予算額	支出
印刷費 Newsletter	30,000	23,279
出版委託費	3,000,000	0
PSB 2020年 Vol35 (1-4)	0	0
和文誌40・41合併号		
和文誌42号	3,000,000	0
和文誌43号		
事務費	300,000	243,986
発送費	150,000	29,166
冊子発送作業費	100,000	10,500
その他	50,000	204,320
和文誌編集補助	20,000	0
英文誌編集補助	20,000	20,000
シンポジウム補助金	300,000	300,000
交通費	50,000	0
学会賞	20,000	0
学会選挙費用	0	0
自然史学会連合分担金	20,000	20,000
日本分類学会連合分担金	10,000	10,000
男女共同参画連絡会分担金	10,000	10,000
予備費	20,000	0
小計	3,800,000	627,265
次期繰越金	6,604,559	9,400,242
合計	10,404,559	

2020年度片岡基金決算報告

(期間：2020年1月1日～12月31日)

収入の部	収入額
利息	4
前年度繰越金	428,379
合計	428,383

支出の部	支出額
片岡奨励賞副賞	50,000
PSB論文賞副賞(楯)	21,945
郵送料	6,656
次年度繰越金	349,782
合計	428,383

種生物学会 2021年度 予算 期間：2021年1月1日～12月31日

収入の部	予算額
国内会員会費	1,600,000
購読料	20,000
著作権料	100,000
PSBロイヤリティ	0
その他	20,000
小計	1,740,000
前年度繰越金	9,400,242
合計	11,140,242

支出の部	予算額
印刷費 Newsletter	30,000
出版委託費	3,000,000
PSB 2021年 Vol.36 (1-4)	0
和文誌40・41合併号	
和文誌42号	3,000,000
和文誌43号	
事務費	300,000
発送費	150,000
冊子発送作業費	100,000
その他	50,000
ウェブサイト維持管理費	410,000
和文誌編集補助	20,000
英文誌編集補助	20,000
シンポジウム補助金	300,000
交通費	50,000
学会賞	20,000
学会選挙費用	50,000
自然史学会連合分担金	20,000
日本分類学会連合分担金	10,000
男女共同参画連絡会分担金	10,000
予備費	20,000
小計	4,260,000
次期繰越金	6,880,242
合計	11,140,242

会員数

(2021年9月16日現在)

個人会員	325
一般会員	252
学生会員	73

(会計幹事 堂園いくみ)

種生物学会ニュースレター 第54号

発行 種生物学会
<http://www.speciesbiology.org/>
 編集 富松 裕(庶務幹事)
 〒990-8560 山形市小白川町1-4-12
 山形大学理学部内 種生物学会事務局
 発行日 2021年10月5日